教師を育てた
言葉たち

No. 021

広島県・
私立ノートルダム清心中・高校
山下佳子 先生
やました・よしこ

◎教職歴 14 年。同校に赴任して 14 年目。進路指導主任。担当教科は理科。大学院で地球科学を専攻し、博士号を取得。鉱物研究に没頭。教師として母校に戻った今、楽しみとしているのは宗教音楽の鑑賞・研究だという。

大学の研究職に進んだ私が本校の教壇に立つことを決めたのは、母校で得た素晴らしい出会いや気づきを後輩たちにも経験してもらいたいと思ったからです。卒業生の１人としてではなく、生徒の自己実現を支援する教師として、多感な 10 代の若者たちに向き合うことになるとは、母校から声をかけてもらうまでは全く想像していませんでした。でも、これはきっと素晴らしい縁なのだと素直に思えましたし、自分の気持ちが固まると、生徒に会うのがとても楽しみになりました。

いよいよ教師としての日々が始まろうとする頃、高校時代に私に理科を教えてくださった恩師から贈られた言葉が、「**自分が受けたい授業を生徒にもしてあげなさい**」でした。

新約聖書の中に、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という聖句があります。この言葉は、中学校・高校時代に私が最も身近に感じ、大切にしてきた教えの１つでした。教師になろうとする私への恩師のひと言は、母校での素晴らしい日々を思い出させるとともに、「この教えを実践すれば、教師としての自分も楽しいし、生徒もうれしいはず」と、これからの自分自身のあり方を示してくれたのです。教師としての新たな自分が始まった瞬間だったのかもしれません。

「受けたい授業」というのは生徒によって異なります。理科を得意教科にしたいと頑張っている生徒もいれば、もっと高度な内容をたくさん学びたいと渇望している生徒もいます。大学入試で理科が課される生徒もいれば、そうでない生徒もいます。だからこそ、教科書に載っている知識を共通の土台にしながら、それぞれの生徒のニーズに応えられるような授業をつくるために、「私の今日の授業はどうだっただろうか」と、１日１日を丁寧に振り返るようにしています。

そして、それは授業だけではなく、クラス経営や進路指導でも同じです。その生徒がこうなりたいと本当に思える姿や目標を見いだす支援をすることが求められていると実感しています。教壇に立った瞬間から「先生」と生徒から呼ばれる職業に就いた者として、「これで十分」と自分の指導に安易に満足しないよう、自分への戒めとして、恩師の言葉を今日までずっと大切にしてきました。

生徒に対して思うのは、いろいろな選択肢を持った上で自分自身の生き方を選んでいってほしいということです。「自分にはこれしかできない」「この道を選んだら別の道には進めない」といった、自分を縛りつける思い込みから自由になってもらいたいと思います。そこで教師として私ができることは、授業を始めとする学校生活の様々な場面で、「好き」と思えるものにたくさん出会わせてあげることです。そして、私自身、教師という想定外の道を選んだ今、こんなに幸せな日々を生徒と過ごしていることを、これからも生徒に伝えていきます。何があるか分からないからこそ面白い人生の楽しみを、ともに楽しんでいきましょう！と。

広島県・私立ノートルダム清心中・高校　全日制／普通科／女子校／1学年約 180 人／ 2020 年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、東京大、一橋大、京都大、大阪大などに 109 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ 381 人が合格。